

「オツベルと象」の象、又は白象

工 藤 哲 夫

(以下の注の記号・番号の内、アルファベットは内容に関する補注、アラビア数字は出典・文献注を表す。)

一 「四神地名録」

帝国図書館に所蔵されていた写本、古松軒「四神地名録」^①中に、次の一節がある。

中野村

明王山宝仙寺。新儀真言宗。無本寺の寺にて、御朱印廿三石六斗余。大槩よき寺院也。むかしは和田村大宮八幡宮の別当寺なりしに、故有りて別当職を末寺へゆずりて、中野の地へ寺をうつせしとの事也。本尊 良弁僧正^作乃仏也。

「中略」たゞ珍らしく思ひしは、此寺に象の牙・頭・鼻の皮有り。是こそ日本に二ツなき宝物とやいはん。昔時紅毛船に乗せ渡りて東都に献ず。追日太クなるによつて中野村へ御預となる。名主の物語りを聞しに、象の^{カコヒ}囿有^{カコヒ}りし所は、くるくゝと堀をほりまし、象をば鉄の大鎖^{クサリ}を以て四足^{クサリ}を繋て外へ出ぬやふにして、数多の象づかひ付添ひて飼置^{カヒ}ひし事也。象づかひの中よろしからぬ

者有りて、象に与ふる食物を減じて私シす。象はかしこきものにして、是を知りて、或時大ひにいかりて四足の鎖繩クサリナワを、糸をきるよりも安くはねきりて、彼象カづかひを鼻にくるくると巻て投飛ナゲせしに、十間余も投られし事ゆへに即死スす。それよりあれちらしで、眼メ□^(に)かゝる木にても、石にても鼻に巻て飛すゆへに、人く大ひにおそれて近くチカクものもなく、いかゝせんとあきれ居たりしに、かねく象をいたはりし六十余の象づかい^(ひ)有りしに、此ものは象の氣にいりにて、平生も外の象づかひとは異なりし故に、いそき此者を呼ヨてたのみしかは、何事かあらんとて、象の食事を持て少しもおそれずして象の側へ行しに、象も嬉しき風ぜひにて耳をふりて食物を喰ふ。それよりはしづまりて何事もなくなりし事にて其節までは、象といふものは仁獸にて、おそろしき事もなきものと、猫のやふに思ひいし象づかい^(ひ)も、おそれいりて念をいれし事也。享保十四己酉の年七ツにて日本に來りて七年目に死す。象のとし廿一といふ。死躰を中野村へ下されしによつて、それを此寺へ納しものなり。僕初て象のかしらを見て、大ひなるにはあきれし事なりき。

賢治はこれを読んで、「オツベルと象」『月曜』第一卷第一號(大15・1・1)の象を描くヒントを得たのではないのだろうか。

「オツベルと象」中の象の外見に関する描写、「第一みかけがまつ白で、牙はぜんたいきれいな象牙でできてゐる。皮も全体、立派で丈夫な象皮なのだ」に於て、何故「皮」のことを持出したのだろうか。「皮」の色が白ということとは直前で叙しているし、この箇所以後に「皮」が問題になる場面はない。これは、「四神地名録」中に「此寺に象の牙・頭・鼻の皮有り」(、点工藤、以下特に断らぬ限り同様)とあつたことの影響ではないだろうか。

「オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前肢にくつつけた」のだが、「四神地名録」中に、「象をば鉄の大鎖クサリを以て四足を繫ツて」とある。「大鎖」と「百キロもある鎖」が対応している。「四足」と「前肢」とは食い違っているが、「オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとはめ」、更に「四百キロある分銅を靴の上から、

「オツベルと象」の象、又は白象

穿め込んだ」のだ。「四足」を「前肢」と「うしろのかかと」とに分割したのであろう。

「済まないが、税金が五倍になった、今日は少うし鍛冶場へ行つて、炭火を吹いてくれないか」

「ああ、吹いてやらう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石も「なげ」とばせるよ」

オツベルはまたどきつとしたが、気を落ち付けてわらつてゐた。

右の象の台詞が必ずしも賢治の想像力・創作力の賜物とは限らないであろうことが、「四神地名録」中の「石にても鼻に巻いて飛すゆへに」という箇所について分る。「なげ」の箇所の校訂の内容は、「石もナデカとばせるよ。――石もなげとばせるよ。」であつて、賢治は原稿で「なげ」と書いていたのが「ナデカ」と誤植されたとの判断に基づくものである。この判断が（結果的に）妥当と考えられる傍証を示すならば――右の「石にても鼻に巻いて飛すゆへに」という箇所の直前に、「彼象づかひを鼻にくるく」と巻いて投飛せしに」という表現がある。この「投飛せしに」を「石」の箇所に繰り入れて賢治の表現が生れたのではあるまいか。

「オツベルはまたどきつとした」わけであるが、少なくとも作者は象の言ったことが嘘ではないと知っていた。つまり、象は「四神地名録」の象の如くにする能力を持っていたが、しなかった。そこに賢治の作意が存する、ということであらう。

二 『廣文庫』及び『古事類苑』

賢治は如何にして「四神地名録」を繙くに至ったのだろうか。（残念ながら）この問に対する明確な解答を見付け出すことができていない。ただ、そこに至る一つの間段階として、『廣文庫』の披読という仮説を提示したい。

帝国図書館に『廣文庫』⁽⁶⁾が所蔵されていた。賢治はこれの中の「^象ぎう」の項を閲読したのではないだろうか。中に小項目「白象」があり、次のような記述を含んでいる。

燕石我衣^三（元文五申年、御濱御殿は飼ふ所の白象、中野と云ふ村より、願ひは出で拜領す、前々象飼料御物入多きゆゑ、儉約はつき、望の者へ願出づべき由、御觸れは付中野名主願出づる、象洞十六文づゝは賣る、見せたる後、酉戌の年頃死にけると云ふ、死する前へ大象となり、高一丈二三尺、長四間ほど、大なる土藏の動くが如し、御濱よて飼付の者、常は御上より渡る

飼草を減じて、養ひとり、依之象彼の飼者を鼻よて巻きて投殺せり、佞臣を知りて不通と云ふ事誠なり、能く理非を正す靈獸なり、〔象志と云ふ本別は所持す〕象の糞は、牛の如く生よてゆるく下す故は洞と云ふ、痘瘡の薬とて賣りたれども、功を見ざるもの一人も無し、賣りたき故の談なるべし、⁽¹¹⁾

賢治はこれを読んで、「白象」を「拜領」したという「中野と云ふ村」に興味を抱き、地誌である「四神地名録」へと探索の歩を進めたのではなかっただろうか。

（と推測を試みた次第であるが、賢治がどうして「四神地名録」の存在〔内容〕を知り得たのかという点など、不明の部分も多い。後考を俟ちたい。〔当該部分が別の文献に引用されているのを見たという可能性もあろう。〕

さて、『廣文庫』「^象ぎう」の項の引用教示文中には、賢治がそこからヒントを得て「オツベルと象」（の或る部分）を書いたのではないかと考えられる箇所が散見する。列举してみよう。

博物新編、三集^五（象與^レ豕同^レ類、其種有^レ二、一產^ニ于亞細亞洲、一產^ニ于亞非利加洲、長約一丈、身高七尺、力勝^ニ九馬、頭大

耳長、目小頸短、不^レ能^ニ俯^レ首飲食、不^レ能^ニ轉^レ盼顧^レ後、鼻長五尺、準端生^ニ一小指、所^ニ以^ニ拾^ニ掇芥粒、〔後略〕⁽¹²⁾

「象」の「力勝^ニ九馬、」由であるが、「オツベルと象」の象の「力も二十馬力もある」⁽¹³⁾。ほぼ二倍に膨らませたか。

「オツベルと象」の象、又は白象

寶物集、中^(一)（昔天竺は國王あり、大象をかひ給ふ、一日は百石の米をくらふなり、をりふし一人の羅漢きさり給ひて、象はむかひて、象はかしこし我れはかなし、我れはかしこしさうはかなしといひてさり給ふ、これを聞きて、象物をもくこすよしぬ、象をかふもの、此の事をおほやけし申しければ、羅漢の咒咀あさるなんめりとて、羅漢をめしてそのゆゑをとひ給へ

ば、羅漢のいそく昔象と我れとへ同朋なりき、あかるは象は聖教のこととりをあらす、されども施を行せしゆゑよ、いま畜生とうまれても、毎日百石の米をくらふ、我れは經論をさとりとるがゆゑよ、人界ようまれ、羅漢果を得たりといへども、檀波羅密を行せざりしゆゑよ、一鉢をむなしくして食を得がとし、此の事を象はむかひて、申しつるなりとぞの給ひける、⁽¹⁴⁾

「毎日百石の米をくらふ」というのは、（文脈からしても）現実の象の生態を表すものではなからう。象の飼料についてのより実際的と思われる記述が、同じく帝国図書館に所蔵されていた『古事類苑』^{(15)(c)}に載っている。

〔江戸名所圖會 十一〕中野寶仙寺 當寺に、享保十四年、交趾國より、

〔中略〕

〔中略〕飼料、一日の間に新菜二百斤、篠の葉百五十斤、青草百斤、芭蕉二株、根を省く、大唐米八升、其内四升程は粥に焚て冷し置て是を飼、湯水二斗、新にあんなし饅頭五十、饅頭五十、九年母三十、又折節大豆を煮冷して飼ふ事あり、青草の中、殊に俗間角力取草と稱するものを好みて食ふ、青草なき折には、根を壺壺ともに飼、或は藁大根のたぐひも食ふとなり、又好んで酒を飲といへり、⁽¹⁷⁾

賢治はこれをも読んで参考とし、象の餌の分量「十把の藁」・「八把の藁」・「五把の藁」・「三把の藁」⁽¹⁸⁾という数字（それは象への虐待を表現するためのものであるが）を案出したのではないだろうか（尤も、一般読者は象の標準的な食べる量を知らないだろうから、作者の意図がどの程度伝わるのか分からぬが）。

『廣文庫』に戻る。

同書、同卷(19)「工藤注「愈愚隨筆、三」(象傷ラル、時々、羣黨相扶ケ將去ル、則チ南ニ向ヒ、跪キ拜ス、鳴キテ三匠マシテ、木ヲ以テ覆フ、)

「象傷ラル、時々、羣黨相扶ケ」という箇所は、「オツベルと象」の「山の象ども」が「みんな出てきて助け」(21)る場面の
ルーツではなからうか。

百家閑窓自語(5)「享保十四年、「中略」○召覽象於内院事、同
年四月、象を宮中よめし入れて、中御門院御覽あり、臺盤所の
まへより引くとき、象まへあしを折りける、ちく類といへども、
帝位のいとたふときをありけむ、やむことなき事なり、」(22)(d)「後略」

「象」の「まへあしを折りける」姿が、(図は少し異なるが)「オツベルと象」の「象」が「鍛冶場へ行つて、べたん
「と」肢を折つて座」(26)るという表現を生み出させたのではなからうか。

淇蝶菴翁艸、(5)(6)「享保十三年、戊申、六月、廣南の商船、象を獻
ず、林信言ノ事物輿ニハ、大雄ハ七歳、雌ハ五歳、其雌ハ長崎にて死
泥國ヨリ象來ルト有リ、雄ハ七歳、雌ハ五歳、其雌ハ長崎にて死
す、同十四年、己酉、三月十三日、長崎を出て、四月洛に入り、寺
町淨華院に象廐を建て、象遣二人、名ハ潭敷、潭綿、廣南人也、
長崎人も一人其の術を傳ふて、是れより加はりて象を遣ふ、象の
長丈餘、高サ七尺、食物ハ饅頭笹の葉等なり、象遣象は跨り、鐵
釣を以て象は打立て、是れを扱ふ、其の疵痛む體もなし、其
の夜星を見れば疵直ち癒(27)ふ、」

坤雅、(4)「(象、南越大獸、長ニ鼻牙、望前如後、三年一乳行孕、
肉兼三十牛、命在ニ其鼻、其所ノ食物、皆以鼻取之、蓋獸之象、以
鼻致用、而不以口、天之象、以氣致用、而不以言、故天
之象、與ニ獸之象、同ニ字、且今服ニ馴巨象、以ニ小斧刃ニ斲之、其金
瘡見ニ星月一即合、」(28)「後略」

「其の夜星を見れば疵直ち癒(29)」・「其金瘡見ニ星月一即合」という箇所は、(情況は異なるが)「西の三日の月」・「西の四日

「オツベルと象」の象、又は白象

の月」・「空の五日の月」・「十日の月」・「十一日の月を見」⁽²⁹⁾る「オツベルと象」の象の姿を彷彿させる。

太平廣記、四^五（張景伯之爲和州、淮南多象、州有獵者、常逐獸山中、忽有羣象、來圍獵者、令不得去、有大大象至獵夫前、鼻絞獵夫、置之于背、獵夫刀仗墜者、象皆爲取送還之、於是駭獵夫、徑入深山、羣象送于山口而返、入山五十里、經大磐石、石際無他物、盡象之皮革、餘血肉存焉、獵夫念曰、得無于此啗我乎、象負之且過、去石五十步、有大松樹、象以背依樹、獵夫因得登木焉、弓墜于地、象又鼻取仰送之、獵夫深怪其故、象既送獵夫訖、因馳去、俄而有青獸、自松樹南細草中出、毳毛鬚、爪牙可畏、其大如屋、電目雷音、來止磐石、若有所待、有頃一次、象自北而來、

遙見猛獸、俯伏膝行、既至磐石、恐懼戰慄、獸見之、喜以手取之、投于空中、投已接取、猶未食噉、獵夫望之、嘆曰、畜獸之愚、猶請救于人、向來將予于山、欲予斃此獸也、予善其意、曷可不救、於是引滿縱毒箭射之、洞其左腋、獸既中箭、來趨獵夫、又迎射貫心、獸踣焉、宛轉而死、小象乃馳還、俄而諸象二百餘頭來至樹下、皆長跪、展轉獵夫下、前所負象、又以背承之、負之出山、諸象圍繞喧號、將獵夫至一處、諸象以鼻破阜、而出所藏之牙焉、凡三百餘莖、以示獵夫、又負之至所遇處、象又皆跪謝恩而去、獵夫乃取其牙、貨得錢數萬、⁽³⁰⁾_{出紀}

「得錢數萬、」という箇所、「オツベルと象」の「万円以上もうけるぜ」⁽³¹⁾という表現のヒントとなつたのではなからうか。⁽³²⁾

三 法 句 經

『廣文庫』の小項目「調象の法」の全文は次のとおりである。

諸經要集、七^三（法句喻經云、佛問象師、調象之法、有幾、答曰有^三、何謂爲^三、一者剛鉤、鉤口著其羈絆、二者減^三食、常

令飢瘦、三者捶杖加其楚痛、由鐵鉤鉤口故、以制強口、由不與食飲故、以制身穢、由加捶杖故、以伏其心⁽³⁴⁾、

賢治はこれを読んだと思われるが、別に賢治自身法句經のテキストを所蔵していたことが、蔵書目録より分る。奥田弘によれば、それは次の書物である。

127 南北対照英漢和訳 法句經 常盤大定 明39・4・28 博文館 ○・四円 菊判 二三四頁

*備考 全。本書は別に大13刊（森江書店）がある。⁽³⁵⁾

「図書名中、二点をあげたものは、賢治所蔵本がいずれか決めがたいものである」⁽³⁶⁾（奥田）由だが、森江書店版は工藤未見なので、所見の博文館版に拠って以下論述する。

法句經にはその名もズバリ「象喩品」という章があつて、勿論右賢治所蔵本に載っているわけであるが、所蔵本は各品の初めに、法句譬喩經や出曜經⁽³⁷⁾（の一部）をも掲げるといふ構成になつていて、「象喩品」のところにも次のような法句譬喩經の經文が示されているのである（全文引用しておく）。

佛、舍衛國に在せし時、一長者あり、佛所に來詣す。世尊坐せしめ、姓字を問ひたまふ。長跪、答へまつる、「字は呵提疊、先王の時、王の爲に象を調めしもの。」佛、調象の法を問ひたまふ。曰く「常に三事を以て、大象を調む。一には剛鉤を以て、其強口を制し、二には常食を減じて、其身穢を制し、三には捶杖を加へて、其心を伏せば、正に便はち調むるを得て、以て王乘に中つべく、亦鬪はしむべく、隨意に前後して、罽礙あるなし」。

佛告げたまふ「吾も亦三事を以て、一切の人を調め、亦以て自ら調めて、無爲に至るを得。一には至誠を以て、口業を制御し、二には慈良をもて、身の剛強を伏し、三には智慧をもて、意の癡蓋を滅す。乃はち偈（三百二十二、三、四、六、七）を説きたまふに、長者之を聞きて、慶喜量り難く、内情解釋して、即ち法眼を得ぬ。

（法句譬喩經、象喩品。⁽³⁸⁾）

「オツベルと象」の象、又は白象

『廣文庫』のそれと内容的に殆ど重なる（「法句譬喻經」は「法句譬喻經」の別称）。これをも、賢治は当然読んだであろう。右の「減^{マツ}食」及び「食を減じて」という箇所に基づいて、オツベルが象の飼料を減らしてゆく場面は書かれたのではないかと推測する。「常令^ニ飢瘦^ニ」は、「まあ、よかつたねや、せたねえ」と照応する。「由^レ不^レ與^ニ食飲^ニ故、以制^ニ身穢^ニ」及び「常食を減じて、其身穢を制し」という箇所の「穢」という文字は、「無禮無作法である、粗野である、暴惡である」という意味である。つまり句の意味は、飼料を減らして暴れ出させないようにする、ということであろう。オツベルの台詞、

「おい、象のやつは小屋にゐるのか。居る？ 居る？ 居るのか。よし、戸をしめろ。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし、早く丸太を持つて来い。とちこめちまへ、畜生めぢたばたしやがるな、丸太をそこへしぱりつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五六本持つて来い。さあ、大丈夫だ。大丈夫だとも。あわてるなつたら。おい、みんな、こんどは門だ。門をしめろ。かんぬきをかへ。つつぱり。つつぱり。さうだ。おい、みんな心配するなつたら。しつかりしろよ。」〔後略⁽⁴⁾〕

中——線部の発想源が右の句であると考えすることは、付会の説とは言えまい。

四 white elephant

香取直一に、「オツベルと象」の象が白象であることの意味を探る、次のような読解がある。

さて、私は白象と仲間の灰色の象たちとは白さをお互いに特別視していないと読みとった。では、白象は象たちの中でオツベルのところへぶらっと、ただ何となくやってきて囚われてしまった少し頓馬な象を際立たせるために、アルビノ（白子）を採用したのだろうか。私は、この見解を、基本的には採りたいのである。賢治作品といえ、何でも仏教的、宗教的……深遠な解釈をほどきさないと気が済まない方々にはなかなか承服されがたいと思うが。この作品は白象崇拜でも白象靈驗譚でもない。

英語の俗語表現に、ホワイトエレファント（白い象）がある。変わりもので、少々トロイ奴を指す隠語（ヤルゴン）のことだ。賢治は英語学習、授業担当の際にこのホワイトエレファントを知ったのではないか。白象は仲間の灰色象たちの中の白い象で、少々変わりもののんきで、人を疑うことを知らぬ善良な象で、好奇心が強く、なりはでかいが子供っぽくて、意気地が無い……こんな象であることを表現しているのが、灰色象たちの中の白い象という表現なのだと思う。白色には、この程度の意味しかないもので、白（い）象と呼ばれるよりもただ「象」と表現されていることが多いのであろう。語り手だけでなく、作者の表現意図もそうだ。^{（註）}（、点香取）

中で傍証として（であろう）掲げられている英語ホワイトエレファントの意味について問題としたい。香取直一は、「変わりもので、少々トロイ奴を指す隠語（ヤルゴン）のことだ」と伝聞の形で書いているが（又は、伝聞の形でしか書いていないが）、これを彼に伝えたのが誰なのか、又は明確に依拠する文献があるならそれを、示すべきであった。この儘ではその妥当性について判定のしようがないのである。

これについて、別の解の可能性を示してみたい。賢治と同時代の、賢治も繙いたかも知れぬ、そして「オツベルと象」発表以前に刊行された英和辞典『^{（註）}英和中辞典』の Elephant の項に、【名】象。A white elephant. 厄介な貴物（註）（原文横書き）とある。象はオツベルにとって「厄介な貴物」だったのである。

では、どういう意味で「厄介」だったのか。やはり賢治と同時代の英和辞典、『^{（註）}英和大辞典』を繙いてみよう。同辞典では、elephant そのものの意味に、^{（註）}大きくて厄介なもの（同）とあり、更に「white elephant」の意味として、「難有

「オツベルと象」の象、又は白象

迷惑〔アガメワ〕のもの、厄介な所持物（維持費を多く要する）⁽⁴⁵⁾（同）とある。

盛岡高等農林学校図書館にも所蔵されていた（版は右引用のものと異なるが）⁽⁴⁶⁾これらの辞書に接し、（又は別の情報源からでも）右の知識を得ていたであろうという仮定に立つての話であるが、白象に設定して「厄介な所持物（維持費を多く要する）⁽⁴⁶⁾」という秘めた意味を担わせたのは、そういう者をすら「うまく自分のものにし」「はたらかせる」オツベルの「偉さ」を表現するためではなかったか。しかしその「偉い」⁽⁴⁷⁾オツベルも最後死ななければならなかったのは、最大の「維持費」＝自己の生命、を「要」したということであろう。

以上、象、又は白象について気の付いたことを羅列して来た。より深い考察へ向けての途中報告としたい。

〔注〕

（a）周知の如く賢治は帝国図書館に足を運んでいた。（「オツベルと象」発表以前の）自身の直接の言及として、次の書簡の一節がある。

私は変りございません。こちらは、大変物価が廉くなりました。魚や青物なんかは、おどろく程です。食事も十二三銭出せば実に立派なものです。図書館の中は、どうも高くて困ります。⁽³⁾

（大正十年六月二十九日付宮沢イチ宛 No.193）

図書館へ行つ⁺見ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或は「創作への道」といふやうな本を借りやうとしてゐます。なるほど書く文なら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎²氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴ぢたりしてゐると思ひですか。どんな顔もして居りません。⁽⁴⁾

（大正十年七月十三日〔推定〕関徳弥宛 No.195）

賢治は帝国図書館「の中で」「オツベルと象」の粗「稿を書いたり綴ちたりし」たかも知れない。

(b)『廣文庫』が盛岡高等農林学校図書館にも所蔵されていたことが、目録より分る。⁽¹⁰⁾賢治が在学中より同書に親しんでいた可能性もある。

(c)盛岡高等農林学校にも所蔵されていたが、「オツベルと象」発表より後に刊行された版であるので無関係である。⁽¹⁶⁾

(d)同じ文章(但し字句の異同あり)が『古事類苑』にも載っている。⁽²⁰⁾又『古事類苑』には次のような記述もある。

〔象志〕本朝享保十三年戊申六月七日、象牝^{ヒメ}二頭南京人持來ル、同十九日、長崎十善寺唐人旅館^{ナニヤ}入ル、是南京人蠻國廣南^{クワンナン}渡、此象ヲ求來レリ、

牝象^{メゾウ}七歳 頭長二尺七寸 鼻長三尺三寸 背高五尺七寸 胴圍一丈 長七尺四寸 尾長三尺三寸 壽命最長 背筋有毛餘無之、人ヲ乘ニハ前足折乘之、五十歳ニシテ筋骨備^{タカラ} 速^{ハヤ}百歳白

象トナル 鐵ノ鈎ヲ以テ驅使 芭蕉ノ葉、竹ノ葉ヲ食フ、飲水一タビニ斗計、鼻ヲ以テ捲飲之、其

行水陸共馬ヨリモ速疾、水ヲ涉ニ水底ヲ踏テ行ク、

牝象^{メゾウ}五歳 頭長二尺五寸 鼻二尺八寸 長五尺計 高四尺七寸 胴圍八尺六寸 此親象ハ七

間餘リ有リト、廣南人語之、

此牝象^{*}去年長崎ニ於テ斃ナリ、菓子ノ甘物ヲ多ク食フ、舌ノ上ニ物ヲ生ズ、象奴療治スルニ適ズ、長崎ニ豪氣ナル者有テ、舌ノ上ノ病ヲ濯取ニ、象快然トシテ振尾喜ブガ如シ、然レドモ此ニヨツテ遂ニ斃ル、ナリ、⁽²⁴⁾

(——線工藤、以下同様)

(*)賢治とは直接関係しないが、「牝」は「牝」の誤植である。⁽²⁵⁾

「オツベルと象」の象、又は白象

(e) 小項目「白象」の中に、類似の次の話が載っている。但し、この場合得たのは「錢」でなく、「牙」であるが。

*同書、同卷。(安南人以射獵爲業、每藥附箭鏃、射鳥獸、中者必斃、開元中、其人曾入深山、假寐樹下、忽有物觸之、驚起見是白象、大倍他象、南人呼之爲將軍、祝之而拜、象以鼻捲人上背、復取其弓矢藥筒等以授之、因爾遂騎行、百餘里、入蓮谷、至平石、迴望十里許、兩崖悉是大樹、圍如巨屋、森然隱天、象至平石、戰懼、且行且望、經六七里、往倚大樹、以鼻仰拂人、人悟其意、乃携弓箭緣樹上、象于樹下望之、可上二十餘丈、欲止、象鼻直指、意如導令復上、人知其意、還上六十丈、象視畢走去、其人夜宿樹上、至明見平石上、有二目光、久之見巨獸、高十餘丈、毛色正黑、須臾清朗、昨所見大象、領凡象百餘頭、循山而來伏于其前、巨獸履食二象、食畢、各引去、人乃思象意欲令其射、因傳藥矢

(*) 「同書、同卷」とは「太平廣記」⁽³³⁾を指す。

端、極力射之、累中三矢、獸視矢吼奮、聲震林木、人亦大呼引獸、獸來尋人、人附樹會其開口、又當口中射之、獸吼而自擲、久之方死、俄見大象從平石入一步一望至獸所、審其已死、以頭觸之、仰天大吼、頃間羣象五六百輩、雲萃吼叫、聲徹數十里、大象來至樹所、屈膝再拜、以鼻招人、人乃下樹上其背、象載人前行、羣象從之、尋至一所、植木如隴、大象以鼻揭楂、羣象皆揭、日旰而盡、中有象牙數萬枚、象載人行、數十步內、必披一枝、蓋示其路、訖尋至昨寐之處、下人于地、再拜而去、其人歸白都護、都護發使隨之、得牙數萬、積表牙爲之賤、使人至平石所、巨獸但餘骨存、都護取一節骨、十人舁致之、骨有孔通、人來去、⁽³²⁾出廣異記

(f) 参考迄——「法句譬喻經」は、漢訳「法句經」七五六偈中から二八七偈を選び出して、それらの偈が、どのような場合にどのような因縁で、説かれたのかを述べる物語を集めたものである。これに類似するものとしては、パーリ「法句經」の註釈であるDhammapadapiṭṭhakathā、説一切有部所伝の「法句經」といわれるUdānavargaの注釈書とされるものの漢訳「出曜經」とがある⁽³⁷⁾。

(g) 続いて「②一種の圖引用紙⁽⁴⁴⁾」という意味も書かれているが、これはこの際無関係。

(1) 東京堂出版編集部編『新帝国図書館和古書目録(中巻)』(昭60・10・15 発行所・東京堂出版 発売元・紀伊國屋書店)五八七頁に、「四神地名録 写本・古河辰(古松軒)」・「四神地名録 写本・古川古松軒著」・「四神地名録稿本 古河古松軒手稿本・寛政七年序」の三点が見える。

(2) 該文献所収の活字本には、編纂代表者・本庄榮治郎『近世社會經濟叢書第九卷』(昭2・2・28 改造社)、長澤規矩也編(奥付による。扉には、「責任編集」として、長澤規矩也の他「財部建志」「前島康彦」の名前が並記されている)『江戸地誌叢書卷四 四神地名録／四神社閣記』(昭51・8・30 有峰書店)等あるが、いずれも「オツベルと象」発表以後の刊である。「国立国会図書館所蔵の古川古松軒草稿本を底本とした」(「四神地名録 凡例」二頁)という後者より引用した。以下、「翻印にあたって」の「要領」より抄出——「送仮名・振仮名・濁点は底本のとおりとした」・「欠字・判読不能な箇所は□符で示し、推定判読の場合は、□符の右側に「」で囲んで明示した」・「誤字は、正字を()で囲んで右側に注記した」・「みせ消は原文のとおり記し、その左側に「・」印を付した(以上、同)。

(3) 『新校本宮澤賢治全集 第十五巻 書簡本文篇』(95・12・25 筑摩書房)二二五頁。以下同全集を『新校十五本文』という風に略記し発行所名を省略する。

(4) 同右、二二七頁。

(5) 『新校十二本文』(95・11・25)一六三頁。以下「オツベルと象」よりの引用は、頁数のみ示す。

(6) 以上、一六四頁。

(7) 一六五頁。

(8) 『新校十二校異』(95・11・25)二五九頁。

(9) 国立国会図書館収集整理部監修『帝國圖書館和漢圖書書名目録 第四編ア—サ』(初刊 昭11・3・31 帝國圖書館未見 昭60・7・25 訂補縮刷版 汲古書院所見)六〇七頁。「本目録ハ明治四十五年一月ヨリ大正十五年十二月マデニ増加シタル和漢圖書ノ書名ヲ五十音順ニヨリ排列編纂シタルモノナリ」(同書復刻部の「凡例」四頁)。

「オツベルと象」の象、又は白象

- (10) 盛岡高等農林學校『盛岡高等農林學校
圖書館和漢書目録』(書名は奥付に記載なき故、背文字による。昭12・3・25 奥付に発行所も不記載) 四八四〜四八五頁。
- (11) 物集高見『廣文庫 第八冊』(書名は奥付に記載なき故、巻頭より採った。大5・12・1 未見 大14・6・20 再版所見 廣文庫刊行會) 五五八頁。以下同書を『廣』と略記する。なお、帝國圖書館所蔵のものは、言う迄もなく初版である。
- (12) 同右、五五二頁。
- (13) 一六三頁。
- (14) 『廣』五五三〜五五四頁。
- (15) 国立国会図書館収集整理部監修『帝國圖書館和漢圖書書名目録 第三編』(初刊 大2・6・30 帝國圖書館未見 昭58・7・25 訂補縮刷版 汲古書院所見) 四二二〜四二三頁。「本目録ハ明治三十三年一月ヨリ同四十四年十二月マテニ増加シタル和漢圖書ノ書名ヲ五十音ノ順序ニ從テ排列編纂シタルモノニシテ即書名目録第三編トス」(同書復刻部の「凡例」四頁)。
- (16) (前出) 盛岡高等農林學校『盛岡高等農林學校
圖書館和漢書目録』五二六〜五二七頁。
- (17) 『古事類苑動物部』(奥付に著者名・書名無し。書名は扉による。初刊 明43・9・30 神宮司廳未見 昭4・8・30 複刻 發行所・古事類苑刊行會 發賣所・吉川弘文館所見) 四五九頁。
- (18) 順に一一六四頁、一六五頁、同、一六六頁。
- (19) 『廣』五五四頁。
- (20) 同右。
- (21) 以上、一六七頁。
- (22) 『廣』五五四〜五五五頁。
- (23) (前出) 『古事類苑動物部』四五八頁。
- (24) 同右、四五七〜四五八頁。

(25) 「象志」一丁裏(上野益三解説『博物学短篇集(上)』(江戸科学古典叢書 44)〔昭57・12・6 恒和出版〕一六頁)。

(26) 以上、一六五頁。

(27) 『廣』五五五頁。

(28) 同右、五五六頁。

(29) 順に一一六四頁、一六五頁、同、一六六頁、同。

(30) 『廣』五五六〜五五七頁。

(31) 一六三頁。

(32) 『廣』五五八〜五五九頁。

(33) 同右、五五八頁。

(34) 同右、五六〇頁。

(35) 奥田弘「宮沢賢治の読んだ本 所蔵圖書目録補訂」(初出『銅鑼』40号〔昭57・11〕未見 栗原敦編『宮沢賢治・童話の宇宙』

『日本文学研究資料新集26』(90・12・5 有精堂出版) 所収所見 二二二頁 及び奥田弘『宮沢賢治研究資料探索』(01・10・15

蒼丘書林) 所収所見 二七一頁。引用は後者より。なお次項以下同文献の頁表示の出典もこの順番で、引用に関しても同

様)。

(36) 同右、二二四頁・二七二頁。

(37) 田辺和子「法句譬喻經 解題」(田辺和子校註『法句譬喻經』(新国訳大蔵經 ②本縁部 5)〔00・3・20 大蔵出版〕一五頁)。

(38) 常盤大定『南北對照法句經』(書名は奥付には「法句經」とのみ故、背文字による。明39・4・28 博文館) 一八〇頁。

(39) 一六九頁。

(40) 服部宇之吉・小柳司氣太『改訂増補詳解漢和大辭典』(書名中の「辭」の字、扉他では「字」。奥付の誤植であろう。大5・12・18初版未見 昭2・1・17改訂増補一版未見 昭3・1・15百拾一版所見 富山房) 一一六一頁。なお「改訂増補」という角書の無い「詳解

漢和大事典」という書物が（前出）奥田弘「宮沢賢治の読んだ本 所蔵図書目録補訂」に載っている（二二頁・二六九頁）が、発行年月日が初版と同じ「大5・12・18」であるのに、「〔新訂五〇版〕」とあるのが不可解である。

（41）一六七～一六八頁。

（42）香取直一『オツベルと象』の白・黒系列と赤』（『国文学解釈と鑑賞』748第58巻9号〔平5・9・1〕九八頁）。

（43）齋藤秀三郎『熟語本位英和中辞典／普及版』（大4・7・20第一版未見 大6・8・31改訂版未見 大8・10・10再訂版未見 昭和2・9・1再訂版／第百九十版所見 正則英語学校出版部 日英社）三三七頁。

（44）同右。

（45）以上、井上十吉『井英和大辞典』（大4・9・10未見 大6・11・10四十三版所見 至誠堂書店）六〇二頁。

（46）（前出）盛岡高等農林学校『盛岡高等農林学校図書和漢書目録』四八四頁に「熟語本位英和中辞典」（原文横書き、以下も同じ）の「大4・7

15版（2部）」が、四八五頁に「井上英和大辞典」の「大7・1 45版」「大7・10 53版」「大15・4 39版」が載っている。

（47）以上、一六三頁。

（本学教授）